



初夏は草木がいつせいに成長する季節です。一日を待たずに、時間単位で成長するような気がします。そのすごい野生の生命力を山野草料理にしたり、山野草茶にしていたら、山野草茶にしていたら、だいてやろうという人間の悪趣味について紹介しようと思



道の駅や趣味の店で、スギ



ミツバアケビ (上)、クワ (中)、カキ (下左)、クマザサ (下右)

効能に応じてブレンド 試飲しながら健康に

初夏は草木がいつせいに成長する季節です。一日を待たずに、時間単位で成長するような気がします。そのすごい野生の生命力を山野草料理にしたり、山野草茶にしていたら、山野草茶にしていたら、だいてやろうという人間の悪趣味について紹介しようと思

今は、クワ、カキ、アケビ、カキドワシ、スギナ、ササ、クコ、クロモジ、ネムノキなどが採取の最盛期です。それぞれ、今年伸びた新芽の部分をハサミで切るとよいと思います。所有者のある山野で勝手に採ることはいけません。大体が邪魔になるものが多いので持ち主に了解を得て採取すればOKだと思います。とはいっても、木や草がなくなるまで採ることは慎みたいと思います。

持ち帰ったものは、種類ごとに三つぐらいに切って新聞紙に包んで陰干しにします。どんな種類でも一週間干せば大丈夫です。乾燥したものをオープンまたはフライパンで茶色になるまで煎ります。お茶パックに詰めて、やかんで三〜五分沸騰させたのに飲みます。

陰干しするときも煎るときも、種類ごとに処理してください。煎った後に高血圧にいいもの、糖尿病にいいもの、利尿作用のあるもの等をブレンドして用いたり、味のよいものを中心にブレンドしたりして利用されたいと思います。

理事長 西村 清巳

自然界の旬

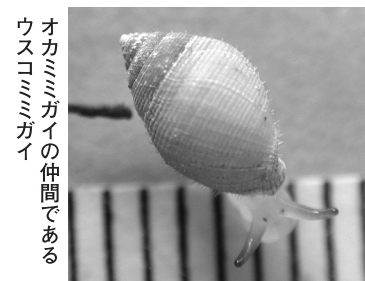


②4 山野草茶を楽しもう

ナ茶、カキ茶、クワ茶、ササ茶、クコ茶、トチュウ茶などを単体で売っていますが、それぞれ癖がありますので、これらのいくつかをブレンドして飲むとまろやかな味になります。

意外な 野外の ガイド ～海の生きもの編～

② オカミミガイ類



海辺にカタツムリの仲間がすんでいることをご存知の方

オカミミガイの仲間であるウスコミミガイ

は意外に少ないかと思われる。カタツムリはエラを持たず、空気から酸素を吸収できる肺を持っていることから、有肺類と呼ばれています。瀬戸内の海辺では、カラマツガイ類やオカミミガイ類など、

地盤が高く満潮時でもめったに海水を被らないアシ原のまわりの枯葉が積もった所や、砂泥地の朽木・石の下などにすんでいます。このオカミミガイ類は陸上生活を送るカタツムリほど乾燥に強くありません。

高波などから命や財産を守るため、海辺に防波堤を築いてきました。また、戦後の復興期から高度経済成長期には農業生産の増大や工場立地のため、干潟やアシ原、遠浅の海が埋め立てられ、

乾燥に弱く特異な環境に潜む 私たちを見捨てないで

約十数種類の有肺類が知られています。カラマツガイ類は潮の満ち引きで水中に沈んだり、空気に触れたりする岩場のうち、やや長く海中にある岩の上などに生息し、オカミミガイ類は河川の河口付近、

せん。また、生まれてしばらくは海水中を漂いながら成長するので、海辺から離れることができません。

古来、人は河口部に広がる平野部を中心に住居を構え、大雨による洪水、台風による

多くの海辺は農耕地や工場地帯などに姿を変えてしまっています。このような環境の変化は、オカミミガイ類の生息場所を減らし、個体の減少をもたらしました。

今年三月に東日本を襲った

(環境保全課 有吉 英治)



オカミミガイ類の生息地 (山口県)

ヒトという種が生き残るために

変化してきた地球の歴史を止めてまで・・・

いきものを まもる

②4 ストロマトライト

山口県の秋芳洞で、洞内の照明がLEDに改修されました。従来の照明の光や熱の影響で繁茂していた藻類などによる鍾乳石の汚れを、LEDにすることで少しでも軽減しようという対策です。光がない場所に照明を常設すると、光合成を行う生物による照明植生が発達し、洞窟内の生態系に多大な影響をもたらします。光や温度を変化させる行為は、造成や埋め立てのように目立つ行為ではありませんが、実は大きな自然破壊なのです。

照明植生の代表種に、藍藻類(シアノバクテリア)があります。藍藻類は、さまざまな環境

に多くの種が存在し、鍾乳洞では糸状のユレモ科の一種が、炭酸を石灰質に変えながら鍾乳石とともに生長しています。実は20億年以上も前、これと同じ作用で地球に大きな影響を与えた藍藻類がいました。かつて酸素のなかった地球では、嫌気性バクテリアのような、酸素を使わない生物が繁栄していました。そこに現れた藍藻類は盛んに光合成をして、猛毒の酸素

を発生させ、結局、それを利用する新たな生物に食べられてしまいます。この自然破壊と絶滅の痕跡は、ストロマトライトという化石として残されています。

この歴史は、人間の環境保全という行為に懐疑をもたらす事実でもあります。もし、酸素を嫌う生物が人間のような知恵を持って、酸素の発生を阻止するという環境保全を行っていたら、人間は生まれてこなかったことになるからで

す。それでも私たちは、自分たちが住みやすい地球を守りたいと願っています。

このシリーズも最終回を迎えることとなりました。

これまで身近な生物や、貴重種をテーマに“いきものをまもる”ことを考えてきました。それは、他の生物のためではなく、ヒトという種が生き残るための行為だということを、自覚しておかなければなりません。私たちは、変化し続けている地球の歴史を止めてまで、現状を維持しようとしているのです。

(環境保全課 半田 信司)
(このシリーズ終わり)



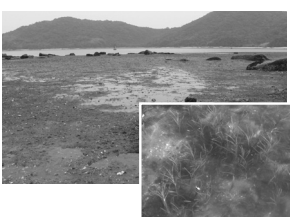
ユレモ科の一種の顕微鏡写真(鞘のまわりに石灰質を沈着させている)

生物調査事業

さまざまな人間活動や生活様式の変化により、近年地域の生物が減っています。豊かな自然は私たちの暮らしにとってなくてはならないものです。当協会では、身近な自然を知り、大切な生き物を守るための生物調査事業を行っています。

地域の自然を知る

陸上生物・水生生物・海域生物調査



大切な生き物を守る

野生動植物保全対策調査



失われた自然を取り戻す

自然再生計画立案・実施



実施の枠組み

住民や行政・事業者の自然との共生の取組みを生物保全の専門家としてお手伝いします。

住民 → 自然との共生 ← 行政・事業

(財) 広島県環境保健協会

問い合わせ：
財団法人広島県環境保健協会
環境生活センター 環境保全課
電話：082-293-1580 (ダイヤル) FAX：082-293-5049